

# j-milkレポート

vol-23  
2016.WINTER

03 牛乳を題材に「大人も子どもに学ぶ」食育へ  
～酪農・牛乳が生命尊重の価値観を育む～

05 特集  
イギリスMMB解体による影響を現地調査  
酪農乳業の国際比較研究会  
GDP2016年アニュアル・ミーティング  
IDFワールドデイリーサミット2016



J-MILK  
REPORT

j-milk report Vol.23

## CONTENTS

- 03 乳の学術連合の窓  
「牛乳」題材に大人も子どもに学ぶ  
～“酪農や牛乳”が生命尊重の価値観はくくむ～  
鈴木 由美子 氏 広島大学大学院教授
- 05 **特集1** イギリスMMB解体による影響を現地調査  
～“指定団体制度のモデル”解体から20年後の評価は～
- 06 **特集2** 国際的な視点で日本酪農のみらいを考える  
～「酪農乳業の国際比較研究会」で意見交換～
- 08 **特集3** GDP 2016年アニュアル・ミーティングに参加  
～酪農乳業のグローバルな課題共有と価値向上を目指して～
- 09 **特集4** ワールドデイリーサミット(WDS)2016 開催  
～オランダで開催された国際的なサミットに参加～
- 10 「酪農乳業産業基盤強化特別対策」の基本的な考え方について
- 11 牛乳摂取と産後うつに関する世界初の研究  
～乳の学術連合学術研究による成果～
- 12 「第4回牛乳ヒーロー&ヒロインコンクール」表彰式  
～21,725 作品から選ばれた入賞作品を表彰～
- 14 病院・施設での乳和食メニューの導入事例を紹介  
～第63回日本栄養改善学会学術総会でランチョンセミナーを開催～  
高齢期のメタボ・フレイル予防と牛乳乳製品の可能性  
～第75回日本公衆衛生学会総会でランチョンセミナーを開催～
- 15 日本の食文化と乳利用を考える視点を提供  
～「日本の食文化史概論」講演を開催～  
小中学校教職員が牛乳を活用した食育を学ぶ  
～牛乳食育研修会を開催～
- 16 酪農乳業食育推進研修会を開催  
～酪農乳業だからこそ伝えられる「牛乳の価値」～
- 17 **新連載** みるくと私  
若者へのミルクの価値訴求に、学生の力を活かして  
福丸 萌香 さん、望月 純也 さん、小野瀬 理香 さん 学習院大学
- 18 **新連載** サポートメンバーインタビュー  
国産の食料の大切さ 学乳を通して伝えたい  
大久保 克美 氏 東毛酪農業協同組合 代表理事組合長
- 18 Jミルクの活動日誌
- 19 今後のスケジュール・グループ紹介・編集後記





乳の学術連合の窓  
食と教育

## 「牛乳」題材に大人も子どもに学ぶ

～“酪農や牛乳”が生命尊重の価値観はぐくむ～

鈴木 由美子 氏 広島大学大学院教授

乳の学術連合・牛乳食育研究会では現在、乳幼児向けの食育教材の開発を進めている。牛乳製品や酪農乳業は、子どもや大人にとってどのような教育的意味を持つのか。監修者として教材制作に関わる鈴木由美子氏（同研究会副代表幹事）に、専門の道德教育的な観点からの見解を聞いた。

### 世界共通の道德的価値「いのち」

ご研究内容と、いま関心をお持ちのテーマをご紹介します。

鈴木：私は、道德教育の実践研究を専門にしています。主要テーマは、世界共通の道德的価値としての「いのち」に関する研究です。平和な世界を実現するためには、世界中の人たちがこれは大事だという価値を共有することが必要です。これまでの研究で、生命尊重が一つの核になり得ることがわかってきました。

現在は、「いのちを大切にすること」を中心とした子どもの「育ち」や教育方法の検証、「いのち」の教育に活用できる教材開発などに取り組んでいます。子どもたちが争いのない明るい未来を生きるために、いまの大人たちにできることを考え、教育の世界から提言していきたいと思っています。

### 酪農体験で育つ生命尊重の価値観

牛乳食育研究会には、設立当初からご参加いただいています。道德教育研究で牛乳や酪農と関わるようになったきっかけは。

鈴木：東京都内の適応指導教室に通う不登校の小中学生たちが酪農教育ファームで活動することになり、教育効果の検証を依頼されたのがきっかけです。自分のことも相手のことも尊重できる態度を軸とする「いのち観」

を測定する尺度をつくり、活動前後の子どもの成長を分析しました。

牧場を訪れた際に、緊張していた子どもたちですが、酪農家の指導を受けながらバター作りや牛の餌やり、乳しぼり、牛舎の掃除などを体験するうちに態度や表情が変わっていきました。子どもの行動に影響のある自己効力感が高まっていく様子が目に見えるようでした。

印象的だったのは、飼育中の子牛を見た時の沈黙です。本来は母牛が子牛にあげるお乳を人間がもらっていることを理解したとき、子どもの中で、それまでバラバラだった「いのち」に関する知識や概念がつながり、生命尊重の価値観が生まれたのだと思います。その様子を見て、酪農や牛乳を通じた教育には人を変える力があると考えるようになりましたね。

学校生活に適應できない子どもは、自尊感情が低く、しかし、他者理解は高い傾向が見られます。よく誤解されるのですが、彼らは他者への共感が不足しているのではなく、むしろ過剰です。自分は身近な人のために役に立つことができず、みんなに迷惑をかけていると考えるために、人間関係の構築が難しくなってしまうのです。

そんな子どもたちにとって酪農体験は新鮮です。乳しぼりや餌やりなどの仕事をこなすことで自己効力感が高まります。途中で餌を少しこぼしても、酪農家さんから「大丈夫だよ」と声をかけてもらおうと、思ったよりも自分は他者に迷惑をかけていないのだと気づけます。結果として自尊感情が向上し、行き過ぎた他者理解は抑えられ、

## INTERVIEW

自他の関係をバランスよく捉えられるようになります。事後の分析で、酪農体験が子どもの自尊感情や自己効力感、生命尊重の価値に基づく判断力などの育成につながることがわかりました。実際に生活や学習への意識も前向きになり、適応指導教室から高校進学を果たした子どももいます。

## 世代を超えた「学び」生む学校給食の共通体験

牛乳食育研究会では、乳幼児向けの食育教材開発を進めています。先生にも中心メンバーとして関わっていただいています。牛乳乳製品の教育的価値や役割をどうお考えですか。

鈴木：学校給食で飲むことに大きな意味があります。学校給食は、「協力する」「助け合う」「分け合う」といった道徳性の形成にも貢献していますし、みんなで牛乳を飲むことは、子どもが健康の重要性を知る機会になるだけでなく、大人になってから栄養や健康の大切さを思い起こす際の共通体験にもなります。食育にとって重要なポイントなのです。

日本では食育や道徳教育も、大人が子どもを指導し、子どもを変えることを重視しますが、大切なのは子どもへの指導を通して大人が変わることです。子どもが食や栄養を学ぶ様子を見て、大人が自分自身の栄養や健康について考え、わが子にも栄養のあるものを食べさせ、自分も食べるようになることが、社会の変化につながるからです。制作中の乳幼児向け教材もこうした点に配慮し、世代を超えて学べる内容になっています。

酪農乳業関係者の方々も、子ども対象の食育活動を通して、大人に発信するという意識を持ってほしいと思っています。その点で、大人が子どもに学ぶ際、学校給食という共通体験のある牛乳は、恰好の題材になります。

子どもが牛乳を飲む姿を見て、かつて自分たちも飲んでいたことを思い起こし、また飲んでみるといった健康行動につなげやすいのです。酪農体験や牛乳工場見学なども、大人が子どもに学ぶという要素を加えることでさらに充実したものになるでしょう。

## 異分野の専門家が連携する強み生かして

Jミルクや「乳の学術連合」について、今後の取り組みへの期待や提言をお願いします。

鈴木：健康寿命の延伸は、国民的課題です。医療や薬に頼るのではなく、栄養を考えて食事や生活習慣を改善し、自分の身体と健康を自らコントロールする術を身につけることが大切です。酪農乳業やJミルクが牛乳乳製品の価値を社会に伝える中で、健康長寿とは自分で生活を変えて自ら獲得するものだということを啓発してほしいと思っています。

乳の学術連合に期待することは、異なる分野の研究者が参加する組織ならではの活動です。女性が牛乳を飲む理由として、イライラが静まってよく眠れるという声が多いそうです。この調査結果を見たとき、学校での「いじめ」は人間関係だけが原因ではなく、子どもの食事背景にあるのではないかと思いました。

そこで、例えば牛乳乳製品の摂取量と、子どもが抱くイライラ感や問題行動との関連性を、学術連合で調査分析してみるのはいかがでしょうか。いじめや暴力の減少に、牛乳乳製品のような身近な食べ物が貢献できることを示せたら素晴らしいと思います。学校現場の教育課題に対して、医学と教育の専門家が連携することで新たな解決策を提案するといった取り組みが、今後増えていくことを期待しています。



牛乳食育研究会  
乳の学術連合



鈴木 由美子 氏  
広島大学大学院 教授

教育学博士(東北大学)。広島大学学校教育学部講師、同教育学部准教授などを経て2011年より現職。2012年から広島市教育委員会委員も務める。生命尊重の価値に基づく道徳教育プログラムや、子どもの心情曲線を活用した授業づくりなどを提案。著書に『やさしい道徳授業のつくり方』(溪水社・2012年、共編著)など。

特集1



# イギリスMMB解体による影響を現地調査

～“指定団体制度のモデル”解体から20年後の評価は～

開催日：平成28年10月10～13日 調査地：イギリス

Jミルクでは、日本の指定団体制度のモデルとなったイギリス・MMB(ミルク・マーケティング・ボード)解体の影響について現地で緊急調査を行った。1994年のMMB解体がイギリスの酪農乳業にどのような影響を与えたのか、Jミルク前田専務理事が酪農乳業の国際比較研究会(次ページ)で報告した。

## 生産者の誤解を生まないことが重要

イギリスのミルクサプライチェーンは、約9割の酪農家が農協系も含む乳業会社との直接契約となっている。その中でも乳業会社、スーパー(流通)、酪農家の三者契約があるのが特徴で、他の国では類を見ない。イギリスでは、すべての取引別乳価テーブルが公表されているが、アーラ・フーズ、テスコ、酪農家の三者契約の取引が最も乳価が高く、続いてアーラ・フーズ、セインズベリーズ、酪農家の三者契約、その次にアーラ・フーズとのダイレクト(2者)契約となっている。また、飲用向けと加工向けの乳価がほぼ変わらないという特徴もある。

イギリス国内には生乳を扱う乳業会社が約400社あるが、年間30万トン以上扱う8社が、乳量の約7割を取

り扱っており、日本に類似した構造である。飲用牛乳については、269社の乳業会社のうち9社で約90%を取り扱う。またチーズについては159社の乳業会社のうち11社で約85%を取り扱うという構造になっている。

MMB解体となった後、酪農家は乳価の上昇を期待したが、実際には乳価は毎年乱高下を繰り返すなど、大変不安定な状況となり、解体以前より国際マーケットの影響を受けやすくなってしまったのが実情だ。

MMB解体の反省を踏まえると、日本では、マーケットや乳業の現状、世界市場の実情に基づいた取引や乳価になっていることを、しっかり酪農家に理解してもらい、誤解をなくすことが重要ではないか。

05

Q MMB解体(1994年)以降の生乳流通や酪農製品市場の多様な変化を経験する中で、現在、MMBについてどのように総括し評価しているのか？



DairyUK政策部長  
ピーター・ドーソン氏

MMB解体は、一部の酪農家による不満がひとつの動機である。用途別乳価から単一乳価となった生乳価格は、国際市場などの影響を強く受けるようになり、一時3割以上急落した。その後も短期間に大きな変動を繰り返してミルクサプライチェーンは不安定になった。政府は「競争を促し酪農と乳業の体質を強化する」ことを目指したが、イギリスの多くの乳業者は外国資本に市場を明け渡した。解体による効果はなく、現在でもMMBが望ましい仕組みだと思う。



酪農家  
(ヨーロッパ農業者連盟酪農委員長)  
マンセル・レイモンド氏

MMB解体以降、国際市場との連動が強まり、酪農は極めて不安定になった。

比較的安定している飲用市場への出荷志向が強まり、小売業からの影響を強く受けるようになった。

結果的には、酪農家も乳業者も市場からの強い支配を受け、産業としての体質の弱体化を招いた。

当時、イギリスの若い酪農家は、新しい変化に対して希望を抱いたが、結果的には、小売業の強い影響を受ける構造になった。



酪農家  
(農家民宿も経営)  
ドナルド・タイソン氏

解体後の約20年間の経験を踏まえると、MMBは安定したシステムで、可能なら今からでも戻すべきだと思う。

酪農は他産業と比較して変化への弾力的対応には限界があり、経営革新を行いたいが、その効果を出すには3年以上はかかる。

現状のように乳価が変動し、生乳の買い手が不安定な状況では、投資のための融資も受けられない。現在のイギリスの酪農乳業は、「変化に極めて弱い」という酪農生産や生乳流通特有の構造的課題に対処できていない。



# 国際的な視点で日本酪農の未来を考える

～「酪農乳業の国際比較研究会」で意見交換～

開催日：平成28年11月30日 開催場所：TKP東京駅大手町カンファレンスセンター

Jミルクでは、研究者・事業者など約100か国、100組織がパートナーとして参加し、酪農乳業に関するデータの収集と分析を行う国際研究組織「IFCN」と連携している。今年度からは、名古屋大学大学院准教授の竹下広宣氏に研究者としてご協力いただいております。今年の活動報告を踏まえて、国際的な視点で我が国の酪農乳業の現状と今後を考える「酪農乳業の国際比較研究会」を開催した。また、名古屋大学大学院教授の生源寺眞一氏による国際的な動向、日本の制度をめぐる議論を踏まえた問題提起に続いて、パネルディスカッションを行った。

## ■ テーマ別講演

## Program

### 講演 1 「酪農乳業の国際比較」

竹下 広宣 氏(名古屋大学大学院生命農学研究科 准教授)

### 講演 2 「英国の生乳流通の現状と課題」 ※ P5 参照

前田 浩史(一般社団法人「ミルク」専務理事)

## ■ パネルディスカッション

論点提示「国際比較の意義を再確認する」

モデレーター：生源寺 眞一 氏

(名古屋大学大学院生命農学研究科 教授)

パネリスト：竹下 広宣 氏

東倉 健人 氏(森永乳業株式会社 執行役員酪農部長)

丹戸 靖 氏(全国酪農協同組合連合会 購買部課長)

前田 浩史

## パネルディスカッション

パネルディスカッションでは生源寺氏が、①国際環境が揺らぎ、国内制度をめぐる不安定感が増す中で、日本の酪農生産の将来像をどう展望するか、②酪農乳業の制度をめぐる議論をどう考えるか、国際比較や歴史的な経緯から学ぶべきことは何か、の2つの論点を提示し、パネリストが意見交換した。

## 小規模でもやる気になる仕組みづくり

国内酪農の展望について、どう考えるか。

丹戸：酪農家は、所得は上がっているが豊かさを感じていない。新規就農者が増えないのも、労働時間の長さなどの問題があると思う。また酪農の経営を分類するとき、規模別や北海道・都府県だけでなく、①生乳生産に徹した経営、②6次産業などで消費者と接点を持ちながらの経営、③稲作や畑作など地域と連携しながらの経営、などの経営者のマインドに寄りそう必要がある。

## 講演 1

## 膨大なデータから世界の需要を予測

IFCNの国際会議に参加した竹下氏は、52か国146の酪農経営データを分析し、日本とドイツ、フランスの同規模経営体との比較などを行った。それによると、頭数規模や一頭当たり乳量は遜色ない水準に達しており、生産コストや所得、所得率の高さが日本酪農の特徴として挙げられる、と報告した。

経済の安定など楽観的なシナリオにおける世界の乳・乳製品の長期見通しでは、2015年からの10年間で生産(需要)が25%、貿易量が51%増加すると予測している。同じデータを用いた日本の長期見通しでは、供給が-1.0%、需要が-0.42%、輸入が+1.5%と予測している。



竹下 広宣 氏

名古屋大学大学院  
生命農学研究科 准教授



5名によるパネルディスカッション

**東倉：**乳価が上がっても乳量が増えないのは日本だけではないか。国による畜産クラスター事業では大規模化だけだが、家族経営をどのように守るか。小規模であっても経営意欲のある酪農家が、やる気になる仕組みづくりを考えなければならない。

**生源寺：**生産基盤とは包括的な概念であるため、その要素を分解して考えないと、処方箋は生まれてこないのではないか。日本酪農は、同じ地域、同じ経営規模でも生産コスト、収益性に差がある。経営パフォーマンスという観点からの分類も必要になる。

### 価値と情報を誤解なく共有する

制度をめぐる議論について、どう考えるか。

**丹戸：**イギリスの視察調査から見たことは、MMB解体によって酪農家は乳価が上がると信じていたが、結果は違った。酪農家自身は、情勢や制度に無知であったと言っているが、我々も十分な情報を届けられていない。もっと分かりやすい形で伝えなければならない。

**竹下：**今回の規制改革に限らず、メディアはネガティブなことをニュースに取り上げ、指定団体が今まで果たしてきた役割、実際に貢献してきた部分など、ポジティブな所には目を向けない。その両面を評価し、その機能の中で何を変えなければならないか、を見ていかなければならない。また、MMB解体後のイギリスは、Tesco(流通)が大きな力を持っている。生産者とメーカーとの間をつなぐ役割を担い、情報をすべて開示し、消費者も含めて流通が主導で価値を共有しているのが特徴だ。

**前田：**指定団体は、不足払い法に基づいて酪農生産者組織として設立されたが、生産者の自主的な取組として、計画生産が始まると、指定団体が生乳流通の調整を行わざるを得なくなった。本来、指定団体に需給調整機能を求めている制度であったにもかかわらず、制度を補完する立場で実態的に作ってきた仕組みである。しかし指定団体の改革議論ではこの部分が触れられていないし、全く分析もされていない。また指定団体の乳価交渉力を強化するとの文言があるが、これは50年前の話。いまは酪農乳業の乳価形成力をいかに強化して、サプライチェーン全体の安定を図りながら、生産者、乳業者、小売業者、消費者がフラットにお互いの利益を分かち合うか。指定団体と乳業者を敵対関係で見ているのは古典的ではないか。

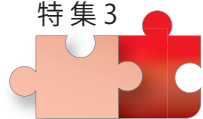
**東倉：**前田氏が述べた計画生産は、生産調整型から需要創出型に変わってきているはずだということであり、これを除いて議論されるのはおかしい。しかし、酪農家に市場の情報を十分に伝えてきていないのは、乳業としての反省点だ。Tescoの良いところは消費者が求めている価値を形式知にしたところ。これは日本の乳業も見習わなければならない。

**生源寺：**今後は、きちんとしたエビデンスや調査をともなった中長期的な視点を示していくことが必要である。また、農協や指定団体への不満は、かけ違いだったものが深刻化する。酪農経営が多様化する中、組織として理不尽な要求があるにしても、受け止める懐の深さが求められているのではないか。



酪農乳業関係者約130名が参加

特集3



# GDP2016年アニュアル・ミーティングに参加

～酪農乳業のグローバルな課題共有と価値向上を目指して～

開催日：平成28年10月14日・15日 開催場所：オランダ

Jミルクでは、新興市場における新たな機会の創出、国際化の加速、顧客の需要変化、栄養面での政策・規制環境の変化などへの対応を迫られているグローバルな酪農乳業界の課題共有を目的に、グローバル・デイリー・プラットフォーム(GDP)主催の2016年アニュアル・ミーティングに参加した。

## 酪農乳業が社会に果たす役割の伝達を強化

GDPは、2006年にグローバルな乳業大手4社により設立され10周年の節目となる今年は、GDPならびに酪農セクターにとって将来を決定づける年と位置づけ、世界の栄養と健康をリードする使命を新たな視点で打ち出した。設立以来、科学的なエビデンスに基づいて牛乳乳製品の良さを伝える活動で成果を上げるとともに、酪農乳業を一貫したフードチェーンを通じ、社会・コミュニティに対して果たす役割や価値について、酪農関係者やインフルエンサー、消費者との間で、ストーリー性を持たせる形で共有を図ってきた。





今後は、GDAA (Global Dairy Agenda for Action) やIDF(国際酪農連盟)、IFCN、国連の関係組織であるFAO(食糧農業機関)などとパートナーシップを

結ぶとともに、酪農乳業セクター内外の組織と協力しながら、酪農乳業が地球環境や社会に果たす役割を伝える活動を強化する。

FAOとの協力に関しては、ロッテルダム宣言という形でIDFが署名しているが、その実行組織としてGDPも機能を果たすことになる。

また、乳の価値訴求につながる研究として、①乳脂肪：全脂乳、バター、②乳タンパク：品質と機能性、③栄養と持続可能性、④骨の健康：乳栄養パッケージといったテーマごとに、加盟国で構成する酪農乳業コンソーシアムを組織し、pre-competitive research(競合前段階の研究分野)テーマとして取り組んでいる。

### GDPの今後の活動計画

	NUTRITIONAL SECURITY	SUSTAINABILITY	DAIRY DEVELOPMENT
ムーブメントを作り出そう	10億人プロジェクト 世界幅広く酪農乳業と接点のある10億人に目的を持った統一メッセージを発し届ける	アフィニティグループ アライアンス グローバルに酪農セクターについての話に共通の価値を持ち共感するグループとつながる。	
 効果を得るための“パートナー”づくり	乳タンパクの品質面での優位点を証明 国連 FAO	国連(UN)との関わり強固に グローバル持続可能性 枠組み作り 国連 Dairy Asia	飢餓軽減への酪農乳業の効果について 国連 FAO
持続可能な開発目標(SDG's※)との連合			
 <p>1. 貧困をなくそう 2. 飢餓をゼロに 3. すべての人に健康と福祉を</p>			 <p>12. つくる責任つかう責任 13. 気候変動に具体的な対策を 15. 陸の豊かさを守ろう</p>
			 <p>5. ジェンダー平等を実現しよう 8. 働きがいも経済成長も 10. 人の国の不平等をなくそう</p>

※SDG's: FAOが打ち出したSustainable Development Goals Agenda 2030 出典: GDPアニュアルミーティング資料より(和訳または意訳)



## 特集4



# ワールドデューリーサミット(WDS)2016開催

～オランダで開催された国際的なサミットに参加～

開催日：平成28年10月16日～21日 開催場所：ロッテルダム、オランダ

IDF(国際酪農連盟)が主催するWDS2016が開催され、グローバルな枠組みで酪農乳業の役割・価値を求める方向性が示された。また日本から学習院大学の福田怜生先生がマーケティングセッションの講演者として参加され、講演の中で、日本における牛乳の価値向上に向けたマーケティングコミュニケーション戦略について紹介した。

## 日本の食育を通じたマーケティングを紹介

IDF WDS 2016 のテーマは“Dare to dairy”。「酪農乳業に思い切って取り組む」、「酪農乳業に挑戦する」といった意味である。酪農乳業が抱えるグローバルな問題や地域ごとの課題に対し、酪農乳業の役割や価値を積極的に打ち出すことで業界内外に広く理解を求めていこうという積極的な意志が込められている。

開催期間中には IDF が取り組む戦略のメイン項目である ①スタンダード(規格)、②持続可能性、③栄養を基本に、「健康」、「経済・政策」、「マーケティング」、「酪農業」、「環境」、「技術開発」、「食品安全・衛生」といった幅広い内容で講演や会合が行われた。

このうちマーケティングのセッションには、学習院大学の福田怜生先生が講演者として登壇。日本で行わ

れている学校教育や牧場などでの食育を通じた、新たなマーケティングの切り口に、海外の関係者も関心を寄せていた。(詳細内容は JIDF からの報告などをご参照ください。)

セッション最終日には、IDF 会長 Jeremy Hill 氏と FAO (農業・消費者保護局 事務局長補佐) Ren Wang 氏が、2015 年に国連が打ち出した“2030 Agenda for Sustainable Development”の Global Sustainable Goals (SDG's) 17 項目に向け、酪農乳業セクターが貢献、取り組むことを目指すロッテルダム宣言に署名した。

## 2030年に向けた持続可能な開発目標17項目

FAOの示すSDG's 17項目に貢献することで、酪農乳業の価値向上を図る。

## SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

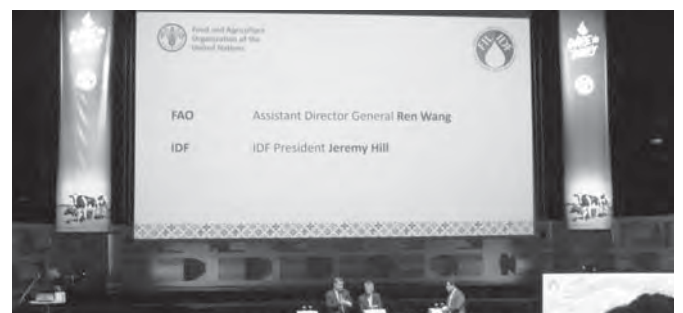
世界を変えるための17の目標



出典：国際連合広報センターwebsiteより



福田先生講演風景



ロッテルダム宣言

# 「酪農乳業産業基盤強化特別対策」の基本的な考え方について

Jミルクは、酪農乳業の将来にわたる持続可能な産業基盤の確立を図る観点から、政府が検討を進める「総合的な TPP 関連対策大綱」等に、必要な施策が盛り込まれるよう『持続可能な産業基盤強化のための今後の酪農乳業対策の考え方』を決定し、平成 28 年 6 月に農林水産省に対して要請を実施しました。

今般、この政策要望を具体的に推進するとともに政府の平成 29 年度予算に反映させるため、「酪農乳業産業基盤強化特別対策」を 9 月に開催した Jミルク理事会において提案・決定いたしました。

この決定内容を受けて、具体的な事業実施要領や乳業者からの拠出方法などを現在協議中ですが、平成 29 年 1 月の理事会において具体的な内容を決定し、皆様にお知らせする予定です。

## 本対策の検討内容と枠組み

～国内生乳生産基盤の確保を第一に事業内容を検討しています～

### 1 事業内容

酪農生産基盤の状況、TPPによる乳製品自由化の加速、加工原料乳生産者補給金の見直し、指定団体制度改革をめぐる議論などを踏まえ、以下の3つの項目を柱に具体的な事業推進方法等を検討しています。

#### (1) 酪農生産基盤の強化

- 緊急的な生乳増産対策として、海外から乳用牛の輸入支援
- 全国連等が実施する、後継牛確保対策への支援
- 地域における生乳生産基盤確保の課題解決に向けた支援

#### (2) 国産生乳高付加価値化の支援

- 乳業者における国産生乳の需要確保を図るための高付加価値化、安全安心を推進するための支援

#### (3) 国産生乳需給の安定

- Jミルクにおいて国産牛乳・乳製品需給の情報共有化と乳製品需給管理の基本的ルールに関する検討

### 2 事業費

乳業者からの拠出等による「酪農乳業産業基盤強化基金」に生産者団体の財源を加えて事業を実施する予定です。

### 3 実施期間

平成29～31年度の3か年継続して実施します。

## 今後の予定

- (1) 平成29年1月開催の理事会において事業実施要領等を検討し、事業の大枠を決定します。
- (2) 2月上旬から「特別対策事業説明会」を各地域(7カ所を予定)で開催する予定です。
- (3) 平成29年3月2日開催予定のJミルク臨時総会で、必要な財源措置及び事業計画等を決定します。

※関係者の皆様には、必要に応じて本対策実施に向けた関連情報をお知らせいたします。

# 牛乳摂取と産後うつに関する世界初の研究

～乳の学術連合学術研究による成果～

開催日：平成28年9月30日 開催場所：大手町サンケイプラザ

第44回メディアミルクセミナーは「牛乳製品摂取と周産期うつ症状との関連」をテーマに、愛媛大学大学院の三宅吉博教授が講演。国内での疫学研究から得られた結果を紹介したほか、さらなるエビデンス蓄積の必要性を指摘した。本研究は、乳の学術連合学術研究を活用して得られた成果でもある。

## 乳製品などの摂取が喘息に対して予防的

日本における栄養疫学の先駆者として知られる海軍軍医総監高木兼寛は、食生活と脚気の発症との関連性を調査し、航海における予防や改善のために大麦、大豆、牛肉の摂取を勧めた。結果、航海中に発症する脚気は大きく減少した。脚気の原因がビタミンB<sub>1</sub>不足であることが解明されたのは、それより後のことだった。このように疫学研究は、メカニズムの解明はさておき、「病気の発症を抑える」という実利を追求する学問であると言える。

研究手法としては、対象の行動を変化させる介入研究と、介入を行わない観察的疫学研究がある。私は、病気を発症していない人たちの疾患発生を防ぐ一次予防を目的とした、観察的疫学研究こそが疫学研究の第一義であり、衛生学・公衆衛生学の土台となる学問だと考えている。

私たちの研究グループでは、妊娠中から産後の母親と生まれた子どもを対象とする観察的疫学研究を各地で実施し、妊娠中の栄養摂取と、母親の産後うつ症状や新生児のアレルギー発症リスクとの関連性を調べている。

2001年に開始した「大阪母子保健研究」(対象:1,002名、期間:妊娠中～子どもが4歳半になるまで)では、食事歴法質問調査票を用いて妊娠中の栄養摂取状況を調べ、摂取量の多い順に4つ程度のグループに分け、うつやアレルギーとの関連を解析した。

その結果、妊娠中のαリノレン酸やドコサヘキサエン酸(DHA)、乳製品、カルシウム、ビタミンEの摂取が多いほど、1歳半時点の子どもの喘鳴(気管支喘息患者などにみられる呼吸音)のリスクが有意に低下していた。イギリスおよびア

メリカでも同様の結果が出ていることから、ビタミンEと喘鳴のリスク低下はかなり確度が高いのではないかと考えている。

また妊娠中のチーズ摂取が多いほど、子ども(3歳半)の虫歯のリスクが有意に低下することもわかった。このほか、緑黄色野菜や柑橘類、βカロテンが子どものアトピー性皮膚炎に対して有意に予防的であることや、逆にリノール酸の摂取が最も多いグループは子どものアトピー性皮膚炎のリスクが約2倍高くなることなどが明らかになった。

## 妊娠中の牛乳摂取で産後うつのリスクが低下

大阪での研究の成果を踏まえ、2007年から「九州・沖縄母子保健研究」(対象:1,757名、期間:妊娠中～8歳)を開始し、現在も継続している。栄養については150品目の食品摂取頻度と量を調査し、より詳細な分析を行っている。

これまでの調査から、魚介類、エイコサペンタエン酸(EPA)、ヨーグルト、カルシウム、ビタミンD、海藻の摂取が多いほど、母親の妊娠中うつ症状の有症率が有意に低いことがわかっている。一方、飽和脂肪酸の摂取量が最も多いグループでは、妊娠中うつ症状の有症率が1.74倍高くなっている。さらに生後4か月時点の調査では、妊娠中の牛乳摂取が多いほど、母親の産後うつ症状のリスクが低下するとの結果が得られた。牛乳が産後うつに対して予防的であることを示唆する結果が出たのは世界初で、今後のさらなるエビデンスの追加やメカニズムの研究が期待される。

今回紹介したのは、日本人を対象とした継続調査から得られた貴重なエビデンスだが、この一つの結果だけで真偽を判定することはできない。多くの研究結果を統計的に解析するメタアナリシスによって結論を下す必要があり、そのためにはより多くのエビデンスを蓄積しなければならない。栄養疫学の分野において、日本人対象のエビデンスは極めて乏しいのが現状で、さらなる研究の拡大が求められる。私たちとしても、国内での疫学研究を今後も継続し、一次予防に資するエビデンスの蓄積を図っていきたいと考えている。



三宅 吉博 氏

愛媛大学大学院  
医学系研究科 教授

# 「第4回牛乳ヒーロー&ヒロインコンクール」表彰式

～21,725作品から選ばれた入賞作品を表彰～

開催日：平成28年11月26日 開催場所：ホテルJALシティ田町

Jミルクは、農林水産省、独立行政法人農畜産業振興機構、公益社団法人全国学校栄養士協議会などの後援により、「牛乳」をモチーフにした自分たちの「ヒーロー」や「ヒロイン」を子どもたちにキャラクターとしての絵に表現してもらう「第4回牛乳ヒーロー&ヒロインコンクール」を実施した。今年度は、新たに国際連合食糧農業機関(FAO)駐日連絡事務所とも連携し、昨年の約2倍、21,725もの作品が全国の小学校から寄せられた。都内で開かれた表彰式では、最優秀賞を含む各賞7作品と団体賞5校が表彰された。

## 世界の食糧問題や飢餓を考える機会に

本年度のコンクールでは、学校での牛乳を活用した食育活動と連携し、世界の食料問題を通して「牛乳の大切さ」を子どもたちに考えてもらうことをねらいに、国連食糧農業機関との連携で応募1作品につき50円を、Jミルクより「FAO飢餓撲滅草の根募金」に寄付させていただいた。10月29日にJミルク会議室で行われた審査会では、キャラクターの発想力と表現の工夫などを基準に選考が行われ、農林水産大臣賞(最優秀賞)の牛乳ヒーローに「ミルク三銃牛」(迎 彩花さん・福島県石川町立石川小学校4年)、牛乳ヒロイン「ミルばあちゃん」(中島 彩葉さん・神奈川県 茅ヶ崎市立汐見台小学校5年)が選ばれた。

審査員の奥村高明・聖徳大学教授は、「私たち審査員は、絵の上手さではなく、どうしてこの絵ができたのか

をみんなの絵から謎を解くように審査をします。牛乳はどのように役に立っているか、牛乳はどのようにつくられているのか、牛乳はいろいろなものに使われているなど、よく考えられている作品を、選んでいます」と子どもたちの発想力を称えた。

## 牛乳だけではなく全ての食べ物を大切に

FAO駐日連絡事務所のンブリ・チャールズ・ポリコ所長は、「いま世界では約8億人が飢餓で苦しんでいます。世界人口は増え続けていますが、地球温暖化や砂漠化などのため食料生産を増やすのは難しいです。日本では家や学校での食べ残しが、毎日ごはん茶碗でひとり一杯分もあります。ぜひ家庭や学校で世界の食料問題について考えてみてください。それが深刻な食料問題の解決につながります」と呼びかけた。

### 表彰式の様子



子どもたちにスピーチするポリコ所長



入選した37作品が展示された



受賞した児童にインタビューする奥村教授

主な受賞作品



農林水産大臣賞：  
牛乳ヒーロー  
ミルク三銃牛  
福島県 石川町立  
石川小学校4年  
迎 彩花さん

作品コメント

世界中のみんなの健康を守る三銃牛は、カルシウム不足にならないように体パトロールしてくれます。剣は骨みつ度を計ったり、おいしい牛乳を届けることができます。愛言葉は「牛乳は健康のために！健康は牛乳から!!」



農林水産大臣賞：  
牛乳ヒロイン  
ミルクばあちゃん  
神奈川県 茅ヶ崎市立  
汐見台小学校5年  
中島 彩葉さん

作品コメント

牛のがらをはっきり、こく書いた所です。ミルクを飲んでめざせ100才ということばのいみはミルクを飲んで体を強くして100才をめざせといういみです。



(独)農畜産業振興機構理事長賞  
MILK GIRL  
神奈川県 市村 萌夏さん



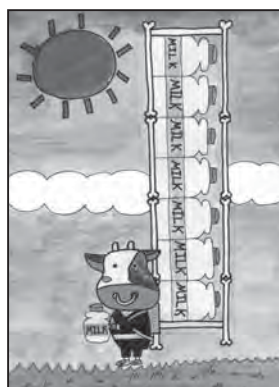
(公社)全国学校栄養士協議会会長賞  
みるくん  
埼玉県 寺南 冴良さん



酪農家特別賞  
牛神様  
高知県 遠賀 有真さん



牛乳工場特別賞  
牛乳のよう精YUME☆MILKちゃん  
埼玉県 相庭 花衣さん



牛乳販売店特別賞  
牛宮(うしみや)ぎゅうじろう  
岡山県 中田 彩葉さん



受賞者の集合記念写真

FAO 駐日連絡事務所 団体特別賞  
千葉県市原市立  
ちはら台桜小学校

団体賞

愛知県春日井市立高座小学校

東京都八王子市立  
みなみ野君田小学校

静岡県浜松市立北浜南小学校

千葉県千葉市立  
幸町第三小学校

※団体賞は、FAO 駐日連絡事務所のご協力により最も応募作品数が多かった団体(小学校)に、「FAO 駐日連絡事務所・団体特別賞」を授与させていただきました。

## 病院・施設での乳和食メニューの導入事例を紹介

平成28年9月9日 ～第63回日本栄養改善学会学術総会でランチョンセミナーを開催～

Jミルクでは、日本栄養改善学会学術総会との共催で、座長に齋藤長徳氏(青森県立保健大学准教授)、講師に西村一弘氏(駒沢女子大学教授)を迎えランチョンセミナーを開催した。参加者には栄養士が多く、120名分の座席は満席で、乳和食への関心の高さが伺えた。

New-  
Washoku

西村氏は、東京都東村山市にある緑風荘病院で実際に乳和食メニューを展開している事例を紹介。参加者からは、「乳和食を採用して病院食の減塩に取り組みたい」との声があがった。

展示会場では乳和食ブースを設け、大量調理レシピなどの配布や説明を行った。

日本栄養士会等の情報を通じて乳和食を知ったという参加者も多く、減塩活動に取り入れたいとの声が聞かれた。また、福岡県の自衛隊ではすでに食事の一部に乳和食を導入しているとの話もあった。



セミナーは満席に



乳和食ブース

## 高齢期のメタボ・フレイル予防と牛乳乳製品の可能性

平成28年10月27日 ～第75回日本公衆衛生学会総会でランチョンセミナーを開催～

日本公衆衛生学会総会と共催したセミナーでは、座長に三木隆己氏(泉大津市立病院名誉院長)、演者に小川純人氏(東京大学医学部附属病院老年病科准教授)を迎え、高齢者の健康問題の改善と牛乳乳製品の役割をエビデンスに基づき説明した。また展示会場内のブースでは乳和食などの情報を発信した。

講演で小川氏は、「高齢期におけるフレイル(虚弱)は、生活機能障害や要介護状態に陥りやすい状態とされ、転倒や骨折リスクの増大、日常生活機能や生命予後にも影響する」と低栄養によるフレイルの危険性を指摘した。

その上で、「加齢に伴う身体の変化を理解し、カルシウム摂取や栄養改善など早期からの予防や対策を行うことが、高齢者の介護予防や健康寿命延伸につながる」と適切な栄養摂取の重要性を強調した。牛乳乳製品の貢献については、「良質なたんぱく質やカルシウムなどの栄養素をバランスよく含んでおり、高齢者の低栄養対策や健康増進に幅広く寄与するだろう」と述べた。

会場は医師・保健師など350名が参加し、ほぼ満席となった。



医師・保健師などが参加



小川純人氏

## 日本の食文化と乳利用を考える視点を提供

～「日本の食文化史概論」講演を開催～

乳の学術連合では、日本における乳利用と、食文化形成や食料生産の関連性をテーマにした勉強会を9月から開催している。乳に関する学術研究の論点整理などに役立ててもらいたい。その一環として、食文化史研究の第一人者である原田信男氏(国士館大学21世紀アジア学部教授)が「日本の食文化史概論」と題した講演を4回にわたり行っている。(9/30、11/24、1/26、4月)

原田氏は、「日本の食文化は特殊な変遷を辿っている。加えて、歴史的な視点では、食の生産と消費といった人々の日常的な活動は軽視される傾向があり、史料も少ない。そのため考古学や民俗学、文化人類学など幅広い観点から調べる必要がある」と指摘。また、「例えば外国人が代表的な日本食としてイメージする料理で『天ぷら』は16～17世紀に伝わった南蛮料理であり、江戸時代の18世紀後半に醤油や酢の発展とともに『握り寿司』(江戸前寿司)が、明治維新で肉食禁止が解かれて牛肉を使う『すき焼き』(牛鍋)がそれぞれ生まれたように、日本食には新しいものが多い」と述べた。



原田信男氏 食文化の研究者も参加

## 小中学校教職員が牛乳を活用した食育を学ぶ

～牛乳食育研修会を開催～

Jミルクでは、10月中旬より11月下旬まで全国4会場(岩手県、茨城県、鳥取県、大分県)で、33都道府県の教育委員会から派遣された小中学校教職員119人が参加して牛乳食育研修会を開催。

本号では、10月20～21日の2日間、茨城県水戸市で開催された研修会の内容についてレポートする。

本研修会は、児童生徒に対する牛乳を活用した食育実践促進を目的に、農林水産省、文部科学省、茨城県教育委員会、酪農乳業団体の後援、全国学校栄養士協議会の協力により、学校教職員を中心に酪農乳業関係者を含め50人が参加して開催された。2日間の研修会では、牛乳の栄養面だけでなく産業や文化・歴史などにも目を向け、学校でのあらゆる教育活動に牛乳を活用するための「教材研究」と、牛乳を題材とした実際の学校授業での指導内容の工夫などについて、「伸びる食育・牛乳編」を活用し研修を行った。1日目には、橘牧場の橘富士子さん、トモエ乳業(株)の渡邊吉彦さんが、牛乳を給食に届けるまでの生産段階での乳牛や餌の管理、牛乳工場での安全・安心への取り組みなどの工夫や努力について、作り手の思いとともに参加者に語った。また、酪農乳業関係者の話をもとに、参加者がグループに分かれ、「生命」「感謝」「循環」「文化・歴史」などのキーワードで、児童生徒に牛乳を通して何を学ばせるかを検討して発表。2日目には、今回の研修成果を、参加者が教師役と生徒役に分かれ、授業形式で発表した。

2日間を通して食育実践研究の第一人者である藤本勇二・武庫川女子大学講師や長島美保子・全国学校栄養士協議会長ら、牛乳食育研究会の会員が中心となり、講演やワークショップ進行を行ったほか、水戸市内の小中学校教職員による牛乳を活用した研究発表も行われた。



講師も交えて活発な意見交換をする参加者

# 酪農乳業食育推進研修会を開催

～酪農乳業だからこそ伝えられる「牛乳の価値」～

開催日：平成28年11月8日 開催場所：大手町サンケイプラザ

最近、「酪農体験」「出前授業」「工場見学」など、酪農乳業による食育活動が行われている。今後さらに活動内容を充実させていくためには、学校が求める教育ニーズも踏まえ、酪農乳業だからこそ伝えられる食育プログラムの組み立てが必要である。Jミルクでは、食育活動における酪農乳業の課題解決に役立てていただくことを目的に酪農乳業食育推進研修会を開催した。

## 社会や文化的な側面から理解を

前田氏は、「牛乳の栄養健康面での価値を問うと必ずカルシウムという答えが出てくる。そもそも戦後、学校給食を導入した際の牛乳の位置付けは、動物性たんぱく質を摂るため、カルシウムではなかった。しかし調査によると毎日の給食に出される牛乳は、カルシウムを摂るためと捉えられており、牛乳の栄養的価値を幅広く訴求しようとしてもカルシウム以外はなかなか浸透しない」と健康栄養面での価値訴求の問題点を挙げた。

さらに今後の食育活動においては、「ミルクの食品としての特性、価値を認知させるエビデンスの発信。また酪農乳業の産業的価値、乳糖不耐の問題、学校給食を通して生まれたミルクに対しての規範性など、社会や文化的な側面からも理解する視点が重要だ」と述べた。

## 消費者に届ける“誇り”“信念”伝えて

國分氏は、「学校現場では、子どもたちに命の重さの実感がない、生活習慣の多様化や個人差が拡大している、保護者との信頼関係が成立しないなどさまざまな問題

を抱えている。こうした中、社会との連携を深め、本物を登場させ、効率的に知識の質を高め、教育の効果を上げることが求められている。酪農乳業が取り組んでいる食育活動は、まさに『開かれた学校』であり、体験の中で未来につながるポジティブなメッセージを、また命から生まれる牛乳を、真心を込めて消費者に届ける誇りや、信念を必ず伝えてほしい」と語った。

## 関係者の役割を明確にしたプログラムを

ワークショップでは、「学校現場の実情」「年間指導計画を作る前の提案が重要」「工場見学でも五感を刺激する体感が必要」などの意見が出たほか、「工場見学や出前授業などでも酪農家と乳業がともに連携して伝えていく」などの活発な意見交換が行われた。

最後に進行役を務めた松原氏は、「学校教諭、酪農家、乳業メーカーがそれぞれに役割を持ち、ひとつのパッケージとして子どもたちに提供できれば、素晴らしい体験学習になるのではないかと総括した。

### ■ テーマ別講演

### Program

#### 講演 1 「日本人にとっての牛乳の価値とは」

前田 浩史（一般社団法人Jミルク 専務理事）

#### 講演 2 「酪農乳業の教育的価値と実践アプローチ方法」

～教育の場として学習者視点の食育実践を目指して～  
國分 重隆 氏（東京教師養成塾 教授・日本酪農教育ファーム研究会 会長）

### ■ ワークショップ

「酪農乳業の『産業』への共感性を信頼の醸成につなげる食育実践アプローチについて考える」

進行役：松原 明子 氏（オフィスラ・ポート代表）



ワークショップでは活発に意見交換した



講演する國分先生





## 若者へのミルクの価値訴求に、学生の力を活かして

学習院大学経済学部・上田隆穂教授研究室 福丸 萌香さん、望月 純也さん、小野瀬 理香さん

さまざまな立場で酪農乳業に関わる方々に、ミルクとの出会いや思いを語っていただくコーナー。今回は、Jミルクの助成を受けて「牛乳乳製品の価値創造マーケティング」の研究を行っている学習院大・上田研究室の皆さんに、若い世代へのミルクの価値訴求について学生の視点からお話をお伺いしました。



### 社員食堂への乳和食導入の可能性探る

「牛乳乳製品の価値創造マーケティング」という研究課題に対して、当初は身近な大学生にフォーカスしようと思ったのですが、実は自分たちでも日常的に飲む機会が少ないことに気づきました。

そんな中、給食に乳和食を取り入れている事例を聞き、社会人の健康管理という視点で社員食堂に導入できる可能性があると思いました。乳和食は栄養健康面では良いという評価を受けながら、一般的な知名度はまだ低いのが現状です。まずは社員食堂のメニューに採用してもらい、将来的には家庭料理やお弁当などに浸透していけばいいと考えています。

現在の具体的な研究活動としては、社員食堂を訪問して社員さんにお話を聞いたり、乳和食を取り入れる際の課題や効果的な導入方法を検討したりしています。価値創造と絡めたアプローチとしては、例えば企業が負担する健康保険料の低減といった訴求が可能かもしれません。社会保障費の低減は国としても大きな課題になってい

るので、そこに乳和食が役立つことをアピールできれば導入の後押しになると思います。

### 大学生がミルクに触れる機会を増やす

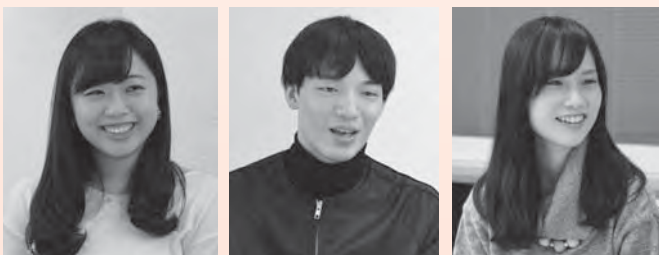
牛乳乳製品や乳和食の価値として、日本人のカルシウム不足や塩分過剰を解決できるという点は推していけると感じています。でもそれだけでは、飲まない人は飲まないままで終わってしまいます。

年配の方は乳和食の認知度や牛乳を摂っている割合が比較的高いですが、私たちの年代は健康への関心が低いこともあって、牛乳の価値を意識していません。若い人たちに牛乳を摂ってもらうのは工夫が必要だなと感じています。

日常的な飲用習慣のない大学生の牛乳への関わり方としては、学校給食や家庭で飲んでいた経験から「身近にあれば飲む」という人と、「牛乳のことをよく知らないから手をつけない」という人が多いと思います。

前者に対しては、学校で飲む機会をつくれたいと思います。大学で牛乳を配るとか、自販機などで手軽に飲めるようなといいですね。学校給食のことを思い出して、牛乳から新たなコミュニケーションが生まれそうな気がします。

手をつけないという人たちには、牛乳を知るきっかけを提供する必要があります。若者が参加するフェスなどへの協賛で認知度を上げたり、学内イベントを通じて学生とコラボしたりする展開もあると思っています。研究を通してミルクの魅力に触れることで、大学生がもっとミルクを好きになる工夫ができればいいと思います。



福丸 萌香さん、望月 純也さん、小野瀬 理香さん  
学習院大学経済学部・上田隆穂教授研究室

INTERVIEW

**新連載** サポートメンバーインタビュー

# 国産の食料の大切さ 学乳を通して伝えたい



学乳問題特別委員会委員

大久保 克美 氏

東毛酪農業協同組合  
代表理事組合長

Jミルクと一緒に活動していただいている関係者の皆さんに、今後の期待や提言を語っていただくコーナー。

## 学乳を通して牛乳乳製品や酪農乳業のどんな価値を伝えたいですか？

学乳は消費拡大の原点ですから、できるだけおいしい牛乳を飲んでほしいと思っています。加えて乳和食を学校給食にも普及させ、子どもの頃から牛乳を食生活に取り入れてもらうことが大切です。農業全体という点でも、学校給食は国産の食料の大切さを伝える一番の近道です。国民が国産品を食べてくれなければ、日本の農業は成り立ちません。

## 業界が一体となって解決すべき学乳の課題は？

学乳は入札制なので品質とコストの兼ね合いが問題になります。競争原理の必要性は理解できますが、手間をかけている牛乳とそうでない牛乳が一緒に扱われるような状況は好ましくない。もう一つは山間部など供給不利地域に対するサポートです。地方財政の厳しさを鑑みても、供給不利地域への補助制度は国として公平に堅持してもらう必要があります。

## Jミルクの活動へのご意見や提言は？

ここ3年続いているバターの特急輸入問題ですが、私自身は輸入に反対です。生産者団体も、たとえ乳価が少し下がってもバターをつくるべきだと思う。足りなくなったらすぐ輸入をしていたのでは、いずれ国民は国産品から離れていくでしょう。酪農家も大変だけど、国産のものを使ってもらいたいから、乳業と生産者が一体になって足りないバターをつくる、それこそが酪農乳業の役割や生産者の現状を知ってもらう、いい機会になるはずです。そうした取り組みへの呼びかけやアピールをJミルクから出してほしいのです。

欧州視察で酪農家と話したとき、自国の食料は自分たちで守るという使命感を感じました。国民の理解と期待が、生産者の誇りを支えています。日本の酪農に足りないのはこの部分。酪農乳業の多面的な価値を国民に知ってもらうことも、Jミルクの大切な仕事だと思います。

## Jミルクの活動日誌

平成 28 年 9 月から平成 28 年 11 月に実施した主な会議やセミナーなどです。

### 9 September

- ① 拡大マーケティング委員会
- ② 第2回マーケティング委員会
- ⑦ 第1回生産流通専門部会
- ⑦ 乳の社会文化ネットワーク・幹事会
- ⑦-9 日本栄養改善学会学術集会(青森)
- ⑬ 第2回健康科学会議幹事会
- ⑭ 第3回需給委員会
- ⑯ 乳和食指導者育成講習会(東京)
- ⑯ 第1回マーケティング専門部会
- ⑳ 第4回課題検討委員会
- ㉘ 第2回理事会
- ㉚ 第1回乳の日本食文化融合に関する勉強会

- ⑳ 第44回メディアミルクセミナー
- ⑳ 認証特別委員会

- ㉗ 第2回ポジティブリスト委員会
- ㉙ 牛乳ヒーロー&ヒロインコンクール最終審査会

### 10 October

- ⑦-9 日本臨床栄養学会総会(大阪)
- ⑨-13 英国酪農乳業現地調査(イギリス)
- ⑬-14 牛乳食育研修会(盛岡)
- ⑭ 酪農乳業みらいセミナー(福岡)
- ⑭ GDP Annual Meeting(オランダ)
- ⑮ 栄養指導実践セミナー(富山)
- ⑯-20 IDF WDS 2016(オランダ)
- ⑳-21 牛乳食育研修会(水戸)
- ㉘-28 日本公衆衛生学会(大阪)

### 11 November

- ⑤-6 日本未病システム学会(福岡)
- ⑧ 酪農乳業食育推進研修会
- ⑯-18 牛乳食育研修会(別府)
- ⑳-25 牛乳食育研修会(鳥取)
- ㉒ 第2回乳の日本食文化融合に関する勉強会
- ㉓ 精度管理研修会(信頼性確保部門責任者)
- ㉔ 牛乳ヒーロー&ヒロインコンクール表彰式
- ㉚ 酪農乳業の国際比較研究会

今後のスケジュール 平成29年1月1日からの会議・行事の開催予定を掲載いたします。

日程	会議・行事	開催地	内容
1. 6	乳業団体新年賀詞交歓会	千代田区	乳業団体における新年賀詞交歓会
1. 7	栄養指導実践セミナー(高知)	高知市	「高齢者のフレイルとその予防に向けた栄養」 「高齢者の栄養不足及び過多における栄養指導の実践」
1. 11	第9回乳の学術連合運営委員会	東京都	乳の学術連合29年度の運営と活動について
1. 13	第5回需給委員会	Jミルク	29年度の需給見通し等について
1. 14	乳和食のすすめ研修会(旭川)	旭川市	栄養士向け調理実習・セミナー(講師:小山浩子氏)
1. 16~25	第2回牛乳乳製品健康科学会議4分野分科会	Jミルク	29年度学術研究の4分野分の一次選考
1. 18	第2回生産流通専門部会	Jミルク	29年度需給見通し、29年度事業改革について
1. 20	第3回理事会	Jミルク	29年度Jミルク事業の基本的な考え方について、 29年度の需給見通し、など
1. 22	平成29年度「食と教育」学術研究審査委員会	Jミルク	29年度学術研究選考
1. 25	平成29年度「社会文化」学術研究審査委員会	Jミルク	29年度学術研究選考
1. 26	第3回乳の日本食文化融合に関する勉強会	東京・中央区	国立館大学・原田教授ご講演(日本の食文化史概論・第3回)ほか
1. 28	栄養指導実践セミナー(岩手)	盛岡市	「牛乳乳製品摂取と生活習慣病の予防と改善~成分とその機能~」 「メタボ改善のための栄養(相談)指導の実践」
2月上旬	特別対策事業・需給見通し説明会	各地域	酪農乳業産業基盤強化事業及び29年度需給見通し説明会
2. 3	第4回マーケティング委員会	Jミルク	平成29年度牛乳の日の取り組み、マーケティング事業について
2. 14	第2回マーケティング専門部会	Jミルク	29年度マーケティング関連事業について
2. 17	第4回理事会	Jミルク	臨時総会の招集について、29年度事業計画及び収支予算について、など
2. 20	平成29年度「健康科学」学術研究審査委員会	Jミルク	29年度学術研究選考
3. 2	臨時総会	KKRホテル 東京	29年度事業計画・収支予算について、 29年度会費及び賦課金の額並びに納入方法について、など
3. 22	牛乳食育研究会 幹事会	Jミルク	29年度活動計画についての検討

## グループ紹介コーナー

「Jミルクで働くスタッフを紹介します。」  
今回は広報グループです。



広報グループ(左から関、鈴木良紀、箸本、鈴木浩子、鎌滝)

## 広報グループの活動紹介

広報グループでは、今年度の大きな事業の強化として、世界の酪農乳業の情報収集及び発信を行うため、鈴木2名が配属され、新しい業務を開始しました。国際化が進展すると、世界に目を向けながら皆様に情報提供すること、国内の酪農乳業の産業基盤の強化につなげることもJミルクの一つの大きな役割であると考えております。また、牛乳・乳製品の消費割合が高い海外のアンチミルク情報や政策に関する情報などを発信してまいりますので、ぜひご期待ください!

Jミルク公式Facebookでは平日ほぼ毎日牛乳ネタを更新しています。いいね!していない方はこの機会にぜひ。前向きな広報グループは酪農や牛乳・乳製品の価値をこれからも発信し続けます。



編集後記

■今年もまた夜の一番長い季節がやってきました。11月の満月は68年ぶりの最接近(スーパームーン)ということで話題になりました。NASAの説明によると、最も遠ざかった時に比べると明るさで30%、大きさで14%増しぐらいになるのだそうです。

■現行の指定団体制度はイギリスのMMBをモデルにしたものといえます。これは当のイギリスでは1994年に解体されたのですが、当時のサッチャー政権の政策もあったものの、乳価の上昇を期待する酪農家の声に押された分も大きかったようです。イギリスでは解体後どのような影響があり、その後どのように推移したのか、現在わが国では指定団体制度の在り方について議論がある中、この問題は関心の向きも多いことでしょう。Jミルクでは今秋イギリスに赴き現地調査をしてきましたので、その概要を本号で取り上げています。そのほかオランダで開催されたGDPやIDFの話題もあり、昨今の国際化の流れを感じとっていただけるのではないのでしょうか。(K.H)

## ポジティブリスト制度に対応した生乳の定期的検査を実施

酪農乳業界では、食品中に残留する農薬等に関するポジティブリスト制度に対応した「酪農乳業一体的な取組み」として、①生産現場での農薬等の適正使用と記帳・保管、②第三者による指導・検証、③これらを実証する生乳中の農薬等の残留検査実施による品質管理システムを構築して、安全の確保に努めています。

この品質管理システムに基づいて、Jミルクでは、農薬等使用実態調査(中央酪農会議実施)を基に管理対象物質を選定し、生乳中における管理対象物質の残留検査(年1回の定期的検査)を実施しています。

平成28年10～11月に平成28年度定期的検査を実施しましたので、ご報告いたします。なお、詳細はJミルクホームページをご覧ください。 <http://www.j-milk.jp/>

## 平成28年度生乳の定期的検査の結果

	管理対象物質数		検体数	検査結果
	北海道	都府県		
動物用医薬品	8	8	104	すべて基準値以下
洗剤・殺菌消毒薬・殺虫剤・駆虫剤など	6	8	96	すべて基準値以下
計	14	16	200	—

注) 検査機関：一般財団法人日本食品分析センター

## 地場産物を活かした学校給食を競う、第11回「全国学校給食甲子園」開催

食育推進の柱である学校給食のさらなる充実と、学校給食の役割を広く国民に理解してもらうことを目的として、第11回「全国学校給食甲子園－地場産物を活かした我が校の自慢料理－」の決勝大会が、12月4日に女子栄養大学(東京)で開催された。(Jミルク後援)

今大会は全国から2,004件の応募があり、決勝大会には、1～4次予選を勝ち上がった12校・施設の代表が出場。審査委員が調理技術、衛生管理、チームワークなど調理過程をチェックし、食味審査で味や見た目を評価。その結果、優勝には北海道足寄町学校給食センター、準優勝には京都府宇治田原町立学校給食共同調理場が選ばれた。

なお、牛乳・乳製品を積極的に活用し、地場産物や郷土に伝わる料理に取り入れた献立を表彰する牛乳・乳製品部門賞は、富山県高岡市立木津小学校、石川県宝達志水町立宝達中学校が選ばれた。審査副委員長の田中延子氏(京都府立大学京都和食文化研究センター 客員教授)は同部門を総評し、「牛乳をデザートに使う献立が多く、主菜や副菜に使っているところが少なかった。健康寿命の延伸という観点からも、カルシウムは非常に重要な栄養素であり、ぜひ牛乳を献立に活用いただきたい」と述べた。



富山県高岡市立木津小学校の給食



石川県宝達志水町立宝達中学校の給食



木津小学校の田中真理子氏、丸山常務理事、宝達中学校の北出宏予氏